

民主主義への変遷期における地方政党

—現代スペインにおける地方諸党の一研究—

長谷川 高生

Regional Parties in the Transition to the Democracy
—A Study of Regional Parties in Contemporary Spain—

Kosei HASEGAWA

This paper deals with the political process of the regional parties in the transition to the democracy in Spain. The politics in Spain has been shaken between two opposite traditions: a centralistic tradition and a liberal-democratic and pluralistic tradition. In modern times, when the democratic tradition has prevailed, power to the autonomy arises greatly. Under the article 151 of the Constitution in contemporary Spain, four regions, Andalusia, Galicia, Catalonia, and the Basque Country have their own rights to the autonomy. This nationalistic and autonomous organization and the economic growth have very deep relationships each other. In Catalonia and the Basque Country, which have got the greatest economic power in all of Spain, regionalistic and nationalistic parties performed their independent influences. But in Andalusia and Galicia, relatively poor regions in Spain, autonomous conditions were strictly controlled. At any rate in the future, Spain, which is delicately balanced between centralistic and federalistic powers, shall be confronted with the matter of nation-integration.

Key words : regional parties, CiU (Convergència i Unió), PNV (Partido Nacionalista Vasco), Catalonia, the Basque Country

地方政党, カタルーニャ集中連合, バスク民族党, カタルーニャ, バスク

- I. はじめに
- II. 前史
- III. カタルーニャ
- IV. バスク
- V. 地方と中央
- VI. おわりに

I. はじめに

スペインの政治は統一的, 中央集権的伝統と自由民主主義的, 多元主義的伝統との, 2つの相対立する伝

統のあいだで揺れてきた。とくに民主主義的伝統が大きく浮かびあがる近代においては, スペイン中央政府に対して地方自治への要求圧力が前面に出てくる。というのは, それが実際, 民主主義の本質的要素に深く

受付 平成12年12月11日, 受理 平成13年1月18日
近畿福祉大学 〒679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5

かかわっているからである。近年、我が国においてもスペイン現代史に関する研究が何冊か刊行されているが、地方政党の動向まで把握した研究はまだ数少ないと思われる。そこで本稿では、とくにスペインで地方自治要求運動に関して歴史的に強力であったカタルーニャとバスクに焦点を当てて、スペインの民主主義への変遷期における地方政党の動向を考察してみたい¹⁾。

II. 前 史

近代スペインは1469年のカスティリアとアラゴンの統一、1492年のモーロ人からのグラナダの奪回、1512年のナバラの併合後、統一国家として出現した。しかし国王は各々の地方王国の行政的、法制的、財政的、文化的特質を尊重せねばならなかった。その後、ブルボン朝・自由主義者が、スペイン国家の行政的統一を試みたけれども、伝統的カルリスタと自由主義者との一連の内戦、全国的規模の産業革命の未発達、ナショナリズムをスペイン国家ではなくバスク、カタルーニャ、ガリシアのような民族的少数派のなかに高揚させた。カタルーニャの、より小さな規模でのバスクの、ダイナミックで進歩的なブルジョアジーは、19世紀の自由主義者との対立、マドリッド官僚の干渉、経済的成功からの優越感から、強い文化的分離感を感じていた²⁾。この差異感からバスクでは1894年、PNV (Partido Nacionalista Vasco, バスク民族党) が、カタルーニャでは1901年、リーガ (Lliga Regionalista, 地方主義同盟) が生まれる³⁾。第二共和制期には、ファシズムと社会主義、自由主義と教権主義、中央集権主義と地方主義の均衡を図っていた自由主義者たちは、1932年にカタルーニャの、1936年にはバスク3県の自治を承認した⁴⁾。しかし内戦から生まれたフランコ体制は、伝統的、祖国的、カトリック的価値概念に順応しない全文化的表象を根絶することを決定した⁵⁾。しかしフランコ体制の独裁が中央集権主義を課するとき、それに対する脱中央集権主義的傾向は、各地方を民主主義に向かう反対派の拠点としてしまうのであった⁶⁾。また1960年代のスペインの経済発展は、スペインの後進地域の脱人口化による、先進地域の過剰人口化を引き起こした。これは土着人口が、自らの言語・文化を再活性化しようとしているバスク、カタルーニャでは、かなりの社会緊張を生み出すものであった⁷⁾。

以上の長い歴史をもった自治要求に対して、新しい民主主義国家スペインは、1975年11月22日の、自治への穏健な支持を与えたカルロス王の就任スピーチ以来、多くの譲歩と賛意を与えていく⁸⁾。以下、とくに重要なカタルーニャとバスクの自治要求政治運動の動

向について考察してみよう。

III. カタルーニャ

フランコ体制下のカタルーニャでは初期には、社会主義者、共産主義者が反体制運動を主導していた。体制末期には、共産主義者、社会主義者、キリスト教民主主義者、社会民主主義者その他を含むカタルーニャ議会 (Asamblea de Catalunya) が1971年11月に結成され、また1974年11月にはホルディ・ブホルによってUCD (Unión de Centro Democrático, 民主中道連合) とイデオロギー的に近いCDC (Convergencia Democrática de Catalunya, カタルーニャ民主中道党) が設立された。1977年春以後は、中道派のカタルーニャ民族諸党が、フランコ体制との闘争で強化された社会主義者、共産主義者と競合していく⁹⁾。

1977年6月の総選挙はカタルーニャでは、マルクス主義左翼の強さを示す結果となった。レベントスのPSC (Partido Socialista de Cataluña, カタルーニャ社会党) とPSOE (Partido Socialista Obrero Español, スペイン社会労働党) との同盟は非常に成功し、カタルーニャ社会党 (PSC) は得票率28%、議席15と、ともに約1/3を得た。またカタルーニャの共産党PSUC (Partido Socialista Unificado de Cataluña, カタルーニャ統一社会党) は得票率18%と8議席を獲得した。これらのマルクス主義諸党で、票の46.6%、議席の48.9%を占拠したことになる。一方、中道諸党ではカタルーニャ民主集中党 (CDC) が中心となったPDC (Pacte Democràtic per Catalunya, カタルーニャ民主協定) が17%の得票率、11議席、UCDが17%の得票率で9議席を得た¹⁰⁾。1978年11月には旧カタルーニャ自治政府の元首相ジョセプ・タラデーリヤス为首班とするカタルーニャ暫定自治政府 (Generalitat) が成立した¹¹⁾。1979年10月のレフェレンダムによる自治政府の承認後の1980年3月のカタルーニャ議会選挙では、1979年3月・4月の総・地方選挙に続いて、左翼のカタルーニャ社会党 (PSC) が勝利するものと思われた。しかし実際は、ホルデ・ブホルのCiU (Convergència i Unió, カタルーニャ集中連合) が135議席中43議席、カタルーニャ社会党 (PSC) が33議席、カタルーニャ統一社会党 (PSUC) が25議席、UCDが28議席、エスケーラ (Esquerra Republicana de Catalunya) が14議席であった。選挙民の一般的穏健化を反映して、極右も極左も議席を取れなかった。しかし移入民の利益を代表するPSA (Partido Socialista de Andalucía, アンダルシア社会党) が2議席を得たことは、カタルーニャ地方・全国諸党にとっては、無

視し得ない警告であった。この選挙後、ホルディ・ブホルは、カタルーニャ社会党（PSC）との連合をも拒否し、UCD、エスケーラ（ERC）の支持を受けてカタルーニャ自治政府の首相（115代）に就任したのである¹²⁾。

IV. バス ク

フランコ体制のバスクへの抑圧は、①全国的・民族主義的諸グループの一般的左傾化と、②民族主義を主張する諸グループの普及を生みだした。それは1959年の、バスク民族党（PNV）の分派、ETA（Euskadi Ta Azkatasuna、祖国バスクと自由）の創設にあらわれている。カトリック・ナショナリズムと社会主義を結合したイデオロギーをもつ祖国バスクと自由（ETA）は、その堅固な構造とメンバーの献身からテロ活動を実行していく¹³⁾。その活動の成功はバスク人民からの広範な受動的支持にも負っている¹⁴⁾。フランコ体制の後半にはバスク民族党（PNV）の影響力が減少するにつれ¹⁵⁾、社会党、共産党の勢力が拡大し、また民族主義諸グループ（abertzales）も進出してくる¹⁶⁾。1975年12月には約20諸党が、バスク民主議会（Asamblea Democrática de Euskadi）に集合したが少ししか効果はなかった¹⁷⁾。

1977年6月の総選挙では社会党が、票の25.8%、26議席中9議席を獲得し、思わぬ強さを示した。しかし中道諸党もバスク民族党（PNV）は、24.4%の得票率で8議席、UCDは7議席と左翼よりも強くカタルーニャと対照を示している。しかしバスク選挙民の全体的左傾化傾向は、顕著なものと言える¹⁸⁾。1977年12月にはナバラ県を除くバスク3県（ビスカヤ、ギプズコア、アラバ）の代表によりバスク地方評議会（Consejo General Vasco）という暫定自治政府が設立され、憲法討論にはいった¹⁹⁾。この討論のなかでバスク民族党（PNV）とUCDは意見が一致せず、1978年12月の新憲法レフェレンダムでは祖国バスクと自由（ETA）とともに穏健なバスク民族党（PNV）も棄権を唱道し、バスク地方の投票率は45%にとどまった。さらに1979年10月の自治令のレフェレンダムでも賛成票は90%であったが、投票率は59.8%どまりであった²⁰⁾。1979年3月・4月の総・地方選挙では、左翼と民族主義者の潮流の発展と、バスク4県に広がる棄権率の上昇が明白化する。祖国バスクと自由（ETA）に近いHB（Herri Batasuna、人民戦線）が3議席獲得したことは、民族主義者の大きな進展であった。これらの選挙でのPSOEの成功は、1980年3月のバスク議会選挙²¹⁾での社会党の勝利を予想させた。しかしその勝者

はバスク民族党（PNV）で、38%の得票と25議席を獲得した。さらに人民戦線（HB）がPSOEを抜いて11議席を得た。このときUCDは、EE（Euskadiko Esquerra、バスク左派）について5位に落ちた。その結果60議席中42議席が民族主義者に確保され、そのうち17議席が極左に属することになる。またこの17議席に社会党、共産党の議席を加えれば、27議席となり左翼支配は明白であった。さらに極左の人民戦線（HB）が16%の得票である一方、極右APが5%の票を得たことはバスク政界の分極化を示すものであろう。選挙後、バスク民族党（PNV）のリーダー、カルロス・ガラエコエチエアがバスク自治政府の大統領となった²²⁾。

V. 地方と中央

以上、カタルーニャ、バスクの地方政党システムは、地方主義的・民族主義的諸党と全国的な地方諸党との競合で形成された。一般的にスペイン地方政治にかかわる左翼全国政党は、カタルーニャ統一社会党（PSUC）やバスク共産党のように、一定の内部自律性や自らの名称さえもった“兄弟党”としての連邦的な（federal）地方政党を形成する。一方、右翼全国政党は左翼ほど連邦化（federalización）の程度は高くなく、形式的にはより中央集権的組織構造を維持していた。しかし、この中央集権化も外観的なものであって、カタルーニャではUCDもUCDカタルーニャ中道党（Centristes de Catalunya-UCD）を設立した。その他エストレマドゥラ、ガリシアなどの地方組織の半独立性も明白なものになっていた。1977年6月総選挙のときにUCDに統合された諸党にも、アンダルシア社会自由党やエストレマドゥラ地方行動党などの厳密に地方レベルの組織が多く含まれていたのである。APでさえいくつかの地方では連邦化（federaliante）の緊張を避け得ず、カタルーニャ自治選挙ではカタルーニャ連帯AP（AP Solidaritat Catalana）を、1979年の選挙ではバスクでバスク法定連合（Unión Foral del País Vasco）を集結したのである。これらの連邦的・半連邦的な地方諸党の存在もさることながら、純粋な地方主義・民族主義諸党の存在は、中核（中央）一周縁（地方）関係に関して困難な問題を設定する。各地方の政党サブシステムが存在は、当該地方政党システム内の諸傾向が全国レベルの政党システム・議会・政府を支配している諸傾向と反対のものとなる可能性を生み出すのである。事実、カタルーニャ、バスクの各議会選挙では、地方主義・民族主義諸党が多数を占め、ガリシアでは全国レベルの少数党（AP）が相対的多数を得たのである。アンダルシア議会のみPSOEに多数を与え

ることで、政党対立の基準を全国モデルの支配的傾向に近づけたのである。もしこの現象が単に2大政党に関してのみ生み出されるなら、その状況は西ドイツやアメリカ合衆国の現状とあまり異ならない。しかしもし地方自治政府・自治議会を支配する諸党が全国レベルの政府・野党と一致しないときには、大きな整合・不整合の問題を形成するにちがいない²³⁾。

また地方議会選挙は、本論で取り上げたカタルーニャとバスクのほか、前述したように1981年10月ガリシアで、1982年5月アンダルシアで開催された²⁴⁾。憲法151条下で完全自治を許されたこの4つの歴史的な地方に関しては、各地方の経済的発展のレベルと民族主義運動の強さと獲得された自治の程度とに強い相関関係が成り立つようである。バスクやカタルーニャでは高い経済成長のもと、バスク民族党(PNV)やカタルーニャ集中連合(CiU)の地方主義・民族主義諸党は各々の自治体の支配政党ではなかったが、最終的に達成された自治令の性格にかなりの影響を及ぼし得た。一方ガリシア、アンダルシアではそのブルジョアたちは、経済的、社会的、政治的にマドリードとつながりを持ち、中央からの独立を主張する民族主義諸党の成長に少ししか関心がなかった。それゆえにこれらの地方の民族主義諸党は政治的に弱く分裂しており、自治過程の後半は全国政党(PSOE, UCD)に統制され、その自治令もより制限的なものとなったのである。

VI. おわりに

以上筆者は、本稿では主としてスペインの民主主義への変遷期における、カタルーニャとバスクの、またこれら両者に比しては自治要求圧力がかなり低く小規模であった、アンダルシアとガリシアの地方自治運動・政治について論考してきた。これら4つの地方の自治承認は、スペイン中央政府と地方自治政府との相互関係の再構築の、長期にわたる広範で複雑な試行錯誤に満ちたプロセスのほんの一部にしかすぎないのであり、しかも未来のスペイン国家の最終的な新構造は、憲法でさえ明確に規定していないのである²⁵⁾。この意味でスペインの国家構造の未来像は、大いなる課題を有していると言わねばならない。

註、引用・参考文献：

- 1) Newton, M.: The Peoples and Regimes of Spain. Bell, D. S. eds., Democratic Politics in Spain: Spanish Politics after Franco, 98, London, 1983. * スペインの地方主義に関しては、宮川智恵子：ス

インの地方主義—1978年新憲法をめぐる論争を中心に—。国際学論集, 1980年7月号, 16—29。またファン・ソペーニャ：スペインの地方自治と民主化—多元的国家の模索と試練—。ソフィア, 1980年春期号, 16—31, さらに長岡顕：スペイン寸描(8) 地域制・地域主義。地理, 第28巻第8号, 75—83などを参照のこと。

*本稿は、拙著：独裁から民主主義へスペインと日本—, ミネルヴァ書房, 1999年の第二章第四節、政党のダイナミズムを補足するものである。またスペイン現代史に関しては、拙著巻末のスペイン関係の参考文献を参照のこと。

- 2) Ibid., 100-102.
- 3) Esteban, J. y López Guerra, L.: Los partidos políticos en la España actual, 172-173, Barcelona, 1982. *バスク民族党(PNV), 地方主義同盟(リーガ)は保守的。1931年には急進的なエスケーラ(Esquerra Republicana de Cataluña)が生まれる。
- 4) Newton, M., op. cit., 102. *このほか、アンダルシア, ガリシア, バレンシア, アラゴンの自治法令が起草されていた。
- 5) Ibid., 103.
- 6) Esteban, J. y López Guerra, L. op. cit., 172-173.
- 7) Newton, M., op. cit., 104.
- 8) Ibid., 105.
- 9) Ibid., 109-110. San Miguel, L. G.: Teoría de la Transición, Un análisis del modelo español, 1973-1978, 161, Madrid, 1981. Story, J.: Spanish Political Parties: Before and After the Election. Government and Opposition, No. 4, 487-488, Autumn 1977.
- 10) Coverdale, J. F.: The Political Transformation of Spain After Franco, 75-79, New York, 1979. Esteban, J. y López Guerra, L. op. cit., 176. Ledesma, F. G. y otros: Las elecciones del cambio, 191, Barcelona, 1977. Newton, M., op. cit., 110.
- 11) 若松 隆, 過渡期の政治—フランコ以後のスペイン—。法学新報, 第91巻, 3・4号, 348—349, 昭和59年7月。Newton, M., op. cit., 110.
- 12) Newton, M., op. cit., 110-111. Esteban, J. y López Guerra, L., op. cit., 176-178.
- 13) Esteban, J. y López Guerra, L., op. cit., 184-185. *祖国バスクと自由(ETA)の左翼主義とナショナリズム間の緊張は、一連の分裂を引き起こす。一連の分裂には、1966年のETA-berri, 1974年10月のETA-militar, ETApolítico-militar, 1976年のEIA(Euskal Iraultzako Alderdia, バスク革命党)の創

設一後のバスク左派（EE）の核となる一，ETAの協調主義とは一致しない一連の民族主義（abertzales）左翼の急進諸党による1979年の人民戦線（HB）の形成などがある。

14) Ibid., 112-113.

15) Esteban, J. y López Guerra, L., op. cit., 181-182. *バスク民族党（PNV）はその歴史に沿って，3つの基本的対立点をめぐって分裂を生み出していった。それは，①急進的な独立主義と全国レベルの諸憲法制度への協力主義との対立，②保守主義と進歩主義との対立，③バスク政府を統制する指導部と県組織の自治傾向との対立である。

16) Newton, M., op. cit., 113-114.

17) Story, J., op. cit., 488.

18) Coverdale, J. F., op. cit., 74-75. Newton, M., op. cit., 114.

19) Newton, M., op. cit., 114.

20) Ibid., 114-115. 若松隆，前掲論文，348-349。また，San Miguel, L. G., op. cit., 159-160. *バスク民

族党（PNV）は，キリスト教民主主義と民族主義をイデオロギーとする保守的な党である。そのイデオロギーの宗教的，社会的側面は他の過激派からPNVを離れさせるが，その民族主義はPNVを過激派に近づける。またテロリズムに対するPNVの態度は曖昧である。さらにPNVの自治的希望がどの程度のものかも明白ではない。

21) Esteban, J. y López Guerra, L., op. cit., 179. *カタルーニャでは独立主義諸党は周辺的な立場であるが，バスクでは独立主義は主要諸党のプログラムにおいて決定的重要性をもっている。独立主義はバスク左派（EE）にとっては，明白には要求しないが重大なものであり，人民戦線（HB）には本質的なものであった。バスク民族党（PNV）は自ら，このテーマについては曖昧な立場を望んだ。

22) Ibid., 179-180. Newton, M., op. cit., 115-116.

23) Ibid., 174-175.

24) Newton, M., op. cit., 118, 122.

25) Ibid., 123-124.